

# 教える

education@asahi.com

平高校は世界遺産の合掌集落で知られる五箇山地方にある。生徒の大半は地元出身だが、岐阜県白川郷などからの入学者も多い。豪雪地帯のため、34人が寄宿舎生活だ。



衣装をつけて「こきりこ」のリハーサルをする郷土芸能部員たち＝河畑写す

## ぐんま総文 アスパラでも

朝日新聞の無料会員制サイト「アスパラクラブ」(http://aspara.asahi.com)の新コーナー「高校生CLUB」で、ぐんま総文を特集しています。

全国取材網をいかして47都道府県代表の話題を徹底紹介。このほか①高校関連ニュースのコーナー②高校生が校内外の話題をブログ形式で報告する「ハイスクール特派員」③テーマに沿って語り合う掲示板「ハイスクール広場」――などの企画を掲載しています。

閲覧・利用には、アスパラクラブへの入会手続きが必要です。誰でも入会でき、会費などはいただきません。申し込みはサイトから

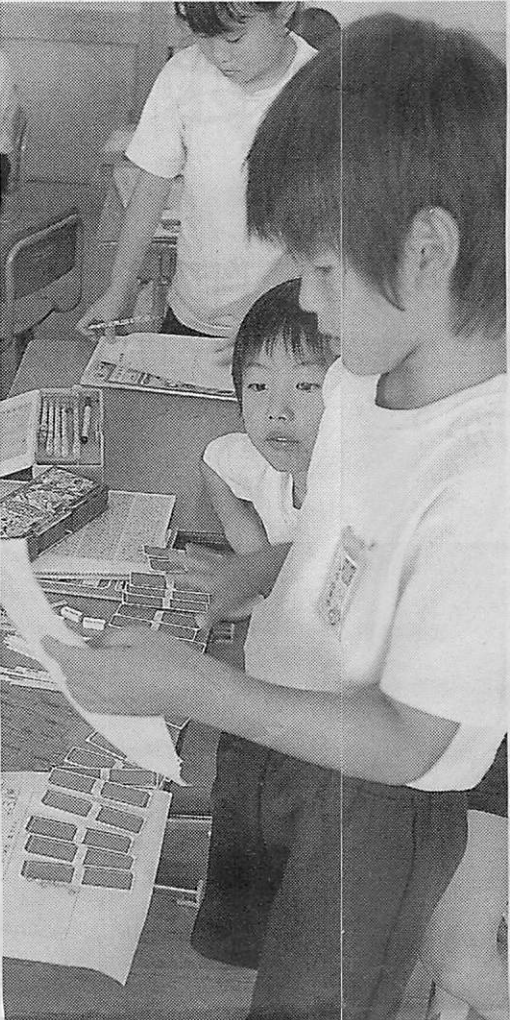
### ぐんま総文 「こきりこ」でV挑む

富山・辛高校 郷土芸能部 一人二役も挑戦

群馬県で8月6日に開幕する全国高校総合文化祭(ぐんま総文)の郷土芸能部門に、富山県から県立南砺総合高校平高校(南砺市)が出場する。全校生徒85人の半数近い41人が所属し、一昨年は最優秀賞に輝いた。今年は男子バレーボール部が全国高校総合体育大会に出場するという朗報も重なったが、9人が郷土芸能部との掛け持ち。大会日程も重なるため、ぐんま総文には部員の一人二役で挑むことになった。(河畑達雄)

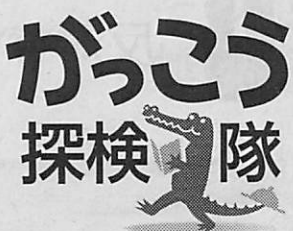
ぐんま総文に向けた練習は5月に本格化。7月からは日曜を除く毎日午後7時から2時間、学校から4キロ離れた平地区の「こきりこ館」で特訓。今年度は、五箇山を代表する「こきりこ」「五箇山追分」「表屋節」を演目を選び、地元の保存会から、踊りや、地方と呼ばれる唄や三味線・胡弓・太鼓・笛などの指導を受けている。

この穴を埋めるため、郷土芸能部の方は、急ぎよ編成替えをした。例えば「こきりこ」に出演する2人が、次の「五箇山追分」にも出る。そのために狩衣衣装から1分半で職人風の衣装に早着替えをする、離れ業にも挑むことになった。



# 「学び合い」で支え合う

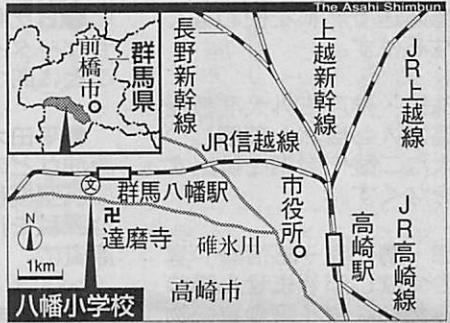
## 群馬県高崎市立八幡小学校



「ねえ、10が10個だよ。100になるよね?」

7月中旬、群馬県高崎市立八幡小2年の算数の授業。男の子が同級生の机に来て、説明を繰り返す。首をかしげていた同級生の表情が急に明るくなり、「そうか!」と声を上げた。

担任の相模玉枝先生は、授業の最初に「10を23個集めた数はいくつ?」とこの日の課題を説明し、プリントを配った。すると子どもたちが動き出す。答えを覚えてもらいに行く子、教室の後ろから算数セットを取り出し、棒やカードを出して考える子、自分の考えた答えを別の手に説明して、正しいか確認する子。座ったままの子は、ほとんどいない。



先生は説明をせず、教室を動き回り、子どもたちの様子を見つと見る。「1の位」と「10の位」を表にしている子を見つと、「なるほど。この間習った位取りを使っているんだね」と、教室中に聞こえるような大きな声で感心してみせる。その子のまわりに、ほかの子が集まってくる。

授業が終わりに近づくと、学び合いは、クラスみんなが分かるまでだよ」と声をかける。また考えている子のところへほかの子が走り、説明する。最後は、分かった子の一人を前に呼び、説明させた。

②2年の算数。手前の子は、自分の考えをほかの子のそばに行って説明している

③3年の国語。みんなで集まって、問題の解き方を分からない子に教える＝いずれも高崎市立八幡小、星賀写す



「自分は駄目とあきらめた子どもたちが、支え合うの中で変わった」と話す。

西川教授は「教師が取り戻した、これまでの指導法は、これからは必要で、当然の覚悟が必要。でも、学体で取り組めば挑戦しやすい。同僚からのアドバイスが」と話す。

(星賀写)

## 全員分かるまで教室動き回る

相模先生は「本当は、子どもたちに最後まで任せるのが学び合いです。今日は、理解が進んだか不安があり、まとめをしてみたい」と反省する。

授業を受けた三浦直哉君は「教えて、分かった人が笑顔になるのが好き。算数は得意で教えるし、国語は時々教えてもらうこともある」と楽しげだ。

八幡小の「学び合い」は4年目を迎える。体育の授業も、互いに助言しながら課題に取り組み。入学して間もない1年生も例外ではない。

### 「ライバル」が「仲間」に

「学び合い」は、上越教育大の西川純教授が提唱している。10年ほど前から院生として各地から来ている教員らとともに研究した。「課題を学級全体で分かる」という目標を明確にすれば、クラスメートはライバルから共同で作業する仲間になるという発想だ。

「静かに」も「座りなさい」も必要ない。子どもたちに任せれば、互いに考えを伝え、理解していきたく動く。そうしたコミュニケーション能力は、社会で生きていく力にもつながる。結果的に、クラスの最低点が80点になり、不登校がなくなるといった効果もあるという。

著書や研究室のホームページ(http://www.jamjun.co)で、全国に伝える。八幡小

「学び合い」は、上越教育大の西川純教授が提唱している。10年ほど前から院生として各地から来ている教員らとともに研究した。「課題を学級全体で分かる」という目標を明確にすれば、クラスメートはライバルから共同で作業する仲間になるという発想だ。

「静かに」も「座りなさい」も必要ない。子どもたちに任せれば、互いに考えを伝え、理解していきたく動く。そうしたコミュニケーション能力は、社会で生きていく力にもつながる。結果的に、クラスの最低点が80点になり、不登校がなくなるといった効果もあるという。

著書や研究室のホームページ(http://www.jamjun.co)で、全国に伝える。八幡小

前は時間は、課題の内容がまいで、なかなか子どもが動き出さなかった。江原先生は「つかみやすい課題すく行動に移る。でも簡単でも、すぐに答えが出て考深まらない。毎回、研究ね」と話す。